

共同研究 浄土真宗における社会活動の基礎的研究 I

——歴史・現状・課題——

主任 友 久 久 雄

研究員 打 本 未 来

〃 高 木 宣 秀

本稿は、平成十八年度および平成十九年度、仏教文化研究所・共同研究に標記の研究課題で採択された報告論文の一部である。

本論文は、現在浄土真宗本願寺派が取り組んでいる社会活動について、明治以降から現在に至るまでその中心となる活動について検討したものである。

第Ⅰ部においては、明治から大正、昭和初期にかけての九条武子の活動、特に関東大震災後の救護活動とその信仰を中心に取り上げる。

第Ⅱ部においては、昭和から平成にかけての活動として、今年二十周年を迎えたビハラ活動の歴史について述べる。

第Ⅲ部においては、ビハラ活動における課題を探るため、ビハラ実践者にアンケートを実施したので、その結果について報告する。

尚、第Ⅰ部は打本未来が、第Ⅱ部は高木宣秀が、第Ⅲ部は友久久雄が中心となり研究したものである。また、今回は紙面の都合上、第Ⅰ部のみの報告となるが、第Ⅱ部、第Ⅲ部は続く本紀要に掲載する。

第I部、九条武子の関東大震災後の救護活動とその信仰

はじめに

浄土真宗本願寺派（以下、本派と呼ぶ）において現在、「ビハーラ活動」と呼ばれる僧侶や門徒による医療福祉分野での社会活動がある。これは一九八五年、田宮仁氏によって「仏教を背景としたターミナルケア（終末期医療）施設」の呼称として、仏教ホスピスに代わり「ビハーラ」と提唱されたのが始まりである。本派では、昭和六二（一九八七）年にビハーラ会員の募集を始め、ビハーラの実践活動研究会を発足させ現在に至っている。

仏教徒が病や老い、死の苦しみをもつ人に寄り添うというビハーラ活動の思想は、釈尊から親鸞以後まで普遍の仏教思想である。これまでも仏教社会福祉の研究において、親鸞の慈悲、同朋の思想や蓮如の講は仏教福祉の原点であるとも言われてきた。⁽¹⁾

現代における「ビハーラ」は、このような思想に基づくビハーラケアを提供する場としての医療福祉施設を指し、「ビハーラ活動」とはビハーラを広めるための仏教徒による幅広い社会活動・運動である。この意味で、ビハーラのその理念としての思想は普遍であるが、一方でこの現代社会に限定されたものであるという側面をもっている。現代社会であるがゆえに生じた問題、たとえば核家族化、超高齢化社会によって家族の介護・看護力はなく、看取りの場が病院など施設であること、医学の発達によって病について予後などを知ることができるようになったこと、病・老い・死が隠された社会であることなど、現代社会のさまざまな要因によって、ビハーラが生まれてきたのである。人を思いやるという思想だけでは、看取することはできないのが現代社会であり、現代のビハーラ活動も近代国家によるさまざまな社会福祉や医療制度と密接に関わっている。この社会福祉や医療制度が国家という枠組みによって成り立っていくのが近代である。

本研究においては、社会福祉・医療制度が成立していく明治以降、本派における社会福祉・医療活動を検討することとする。明治から大正、昭和初期まで真宗教団のみならず仏教界全体が社会福祉・医療活動などの、いわゆる慈善事業を活発に行っていた歴史がある。今回はその中の一つ

として、九條武子による関東大震災後の救護活動とその信仰について取りあげる。

九條武子の人生と社会事業

九條武子は、明治二〇（一八八七）年、本願寺第二十一代宗主大谷光尊（明如）と側室、藤子との間の四男二女の末娘として生まれる。明治二四（一八九一）年、京都府師範学校附属幼稚園に入園、同付属尋常小学校、同高等小学校で初等教育を受けた。その後は、安国淡雲（一八三〇～一九〇五）、赤松連城（一八四一～一九一九）らから寺内での教養と教学教育を受けた。この頃を振り返り九條武子は、「むかしむかしの大昔こんな話もあったのサ、⁽²⁾とって見たい程、私の幼い時分の生活は世にも人にも離れていた。」と語っている。世にも人にも離れたお人形のような生活は、明治三六（一九〇三）年、父光尊が亡くなるまで続いた。彼女は父の死について以下のように語っている。

生まれて初めて人の死を見た。まして骨肉の父の死である。日頃可愛がった我児も忘れてしまったような顔をしておった。頼り無い、ほんとに心細い死というものがこんな造作もないものかとも思われた。夢のような真実のような心もちで温かい間手を握って泣いて泣いて泣きぬれた。⁽³⁾中略年変わって日露戦争がはじまった。耳に聞く話、目に見るもの、すべてが変わって来て何も知らなかった人形の夢はさめた。若い力の目まぐるしい活動が始まって、私の天地は夜が昼になるよりも、もっと激しく展開したのである。

彼女の生活を支える者が父から兄光瑞へ変わることにより、九條武子の日常はお人形のような生活から活き活きとした自由な生活へと変貌したのである。父の死は頼りない可愛いお人形、彼女自身の死であった。

明治四〇（一九〇七）年、兄である本願寺第二十二代宗主大谷光瑞（鏡如）の妻簀子が総裁となって西本願寺仏教婦人会連合会本部を創設すると、九條武子は本部長となり実質的な運営責任者となる。本部長としての九條武子は、簀子と共に巡教の旅を続け教団の近代化に尽力し、また宗門の女子教育の発展に懸命に取り組んだ。

明治四二（一九〇九）年、二三才で簀子の弟、九條良致と結婚する。夫のケンブリッジ大学留学に同伴するためにイギリスに渡り、ロンドン滞

在中、義姉籌子と宗教教育における女子教育、社会事業を視察し帰国した。ロンドン滞在中の九條武子の熱心な視察の様子は、山中によれば『九條武子夫人』につぎのように記されている。

九條武子夫人はこの時分から、婦人の手になる社会事業に、一方ならぬ興味をおもちにのびました。中略西本願寺の伯爵家の姫君でありました九條男爵新夫人が、特に社会事業に着眼され、少しでもその実地見学を、ロンドンにてなさろうとのお望みは、案内役の渡邊氏にしましても、全く意外なことでした。さうして、ロンドンの貧民窟をはじめ、慈恵院、孤児院、養老院など婦人の経営する各種の機関に就いて、いかにも調べている施設の一つ一つを、九條武子夫人は、あくまでも十分に視察し質問し、真剣に見学なさるのでした。⁽⁴⁾

ここから社会事業施設の視察は用意されたものではなく、九條武子の希望であったこと、彼女の社会事業への関心は、遅くとも結婚直後にはあったことがわかる。

明治四四（一九一一年）年、籌子逝去により、九條武子は西本願寺仏教婦人会でますます活躍することとなる。籌子の遺志を継ぎ、宗門による女子大学（現在の京都女子大学）の設立をめざし、婦人会の発展に尽くした。

また九條武子は幼い頃から、父明如に短歌を勧められ、明如の開く歌会で短歌を詠んでいたが、大正五（一九一六）年、佐佐木信綱に師事すると、短歌雑誌に歌を発表するようになる。大正九（一九二〇）年、三年の約束の留学期間を過ぎても帰国しない夫への心情や、巡教で訪れた旅の思いを詠んだ歌を多く集めた処女歌集『金鈴』を出版する。特に「十年をわびて人まつひとり居にされごといはんすべも忘れし」⁽⁵⁾「あはれにもつかれはてたるしれ人は夜さへ昼さへただ君をのみ」⁽⁶⁾など、辛抱強く夫を待ちながら、押さえきれない寂しさ、侘びしさを歌った歌は多くの女性に支持され、反響をよんだ。なかなか帰国しない良致にさまざまな噂もあったが、同年十二月、夫良致は帰国し、二人は築地本願寺内で家庭生活を送るようになる。

大正十二（一九二三）年九月一日、関東大震災の時、築地本願寺も焼失し、九條武子も被災者となった。彼女は震災の体験を親しい友人に宛てた手紙でつぎのように語っている。

ただ地震にばかりおそれて、内に入りませず、半日を暮らし、三時半頃良致帰宅いたし、これも大吞気で、本堂前の避難者などを見まはりにまいたりしてをりますうち、日も暮れかかり、人の顔もうすすの夕方になって、俄然風の向きがかはり、今度は風下になり、一方は八丁堀から、一方は銀座から、どんどん焼き進んでくる有様で、もうかうしてはをられないと、表の者の注意にせき立てられ、着物を着かへましたのと、小さな手かばんに、その晩の野宿の用意にと、毛布や大ぶろしき二、三枚つつみこみ、少しばかり、手近にあった貴金属のたぐひをほりこみました。ただ仏様を身にお供して。〔中略〕これで芝方面に火があつたら、もう死ななければならぬものと覚悟しました。〔中略〕光明は築地の情況を見にと再び出かけましたが、とても熱くて近づけないし、もう火がまはっているらしいから、一刻も早く、この風の間に、青山まで逃げようということになり、君の老人と、小さな荷物を車につみまして、先にやり、私どもは徒歩にて、あちこちの焼ける爆発の音を後にして、淋しいともなんともいはれぬ心もちで、芝公園をさしてあるいてまいりました。ときどき後ろを見ますと、一面火の海でございます。〔7〕

関東大震災はマグニチュード7・9、火災は延べ三日間約四〇時間続いた。この火災によって、公式記録ではないものの、関東大震災翌日の九月二日未明には、東京气象台で気温四七・三度を観測している。九條武子がみた火災と逃げまどう人々、死者は地獄絵図を現実再現したものだ。〔8〕

人もわれも阿鼻叫喚の地獄界ただに譬喩と思ひてありき〔中略〕体験者の一人として、再び去年のようなことが繰り返されたらと思ふ時、自分の修養と覚悟のまだ足らざる事が恥ずかしくなります。〔中略〕親鸞上人の歎異抄の言葉が、あの火に追はれてゆく道すがら、ひしひしと胸に刻まれた時を忘れてはならないと思うてをります。〔8〕

震災後、九條武子は医師、看護師など医療関係者と協力し被災者の救護のため上野公園、日比谷公園の本願寺救護テントを巡回した。後に触れる田中もとは、当時の九條武子の活動を回想してつぎのように記している。

九條武子さんは診療所の外にも風呂を三カ所ほど買って、風呂に入れない人には誰でも入れる野天風呂を作られたり、読物一つない子供の為には沢山の図書を日比谷におくられた。築地には子供の図書館を作られた。⁽⁹⁾

九條武子は医療など救急の活動のみならず、被災者の心や生活を支える細かな気遣いをしていたことがわかる。彼女の活動と共に、ここで少し本派による震災救護活動を記しておく。本派による震災救護活動は『新修築地別院史』⁽¹⁰⁾によると以下の通りである。

第1期

応急救護事業（食料・薬品供給、はがき供給・通信代筆・郵便取つぎ）

テント―（上野公園博物館前・日比谷公園旧音楽堂前・築地本願寺跡・神田明治会館焼）

第2期

◇ 児童保護事業（幼稚園・小学校・夜学校・託児所の開設）

◇ 救療・衛生事業（医療班による診療・薬品巡回供給）

◇ 人事相談事業

◇ 簡易宿泊事業（無料宿泊所）

◇ 簡易食堂事業

◇ 職業紹介・職業補導事業

◇ 教化事業（講演・日曜学校、伝道本発刊、掲示伝道、娯楽提供）

◇ 弔慰（尊号付与、葬祭・永代経・読経、遺骨預かり）

◇ 慰問・慰問品配給（朝鮮人慰問）

本派の事業として挙げられるこれらの事業のうち、たとえば上述の児童保護事業へ充てられた資金の一部は、九條武子が発案した関東罹災児童への寄付金である。寄付金を集めるための愛護袋配布には、寄付金呼びかけ人として九條武子や大谷紆子の名が書かれているものの、寄付金の収集先は「本派本願寺臨時救災事務所」宛となっている。このように、九條武子の手がけた社会事業は個人の事業ではなく本派の事業とされているものもあり、彼女がどの程度関わったかの判別はつきにくい⁽¹¹⁾。九條武子が個人的に大きく関わったことが資料から明白なのは、本願寺救護班から始まった日比谷診療所（後のあそか病院）、年末無料巡回診療と六華園である。

あそか病院は震災直後大正十二（一九二三）年九月、日比谷公園における本願寺救護班の活動から出発している。上野公園と日比谷公園に設けられた本願寺救護班は当初三ヶ月の予定で始められた。上野の救護班は資金と医療者の不足で四ヶ月で閉鎖しているが、日比谷診療所は、大正十三（一九二四）年五月まで続いている。日比谷診療所が続いたのは、看護師の田中もとの存在が大きい。田中もとは兵庫県赤穂、西光寺の熱心な門信徒の家に生まれ、看護師になった。結婚の後、夫を亡くしたため、子を預けて朝鮮、上海で看護師として働いた。その上海で大谷光瑞に出会い、関東大震災の起きたときも光瑞の元にいた学生の世話をしていたため、震災の一報を受け、光瑞の手配により、早々に東京へかけつけた。田中もとは当時の日比谷診療所での活動を振り返り、つぎのように述懐している。

大正十三年二月頃、九條武子夫人が診療所に来られつぎのようにおっしゃった。中略「私は武子武子と騒がれ本願寺関係の人は無論、世間の人から大事にされ勿体ない位ですが、何一つ世間の為に働くことが出来なかった。真に仏祖に申し訳ない事と常々考えておりましたが、私は力となり手足となって働いてくれるものがなければ何も出来ず、そんな人を探していましたが、もし貴女が私の助手となってくれるならばこれからの私の半生を世の為社会事業に捧げ、貧しい人々の為に働かして頂きましょう」とおおせられたので私もそれでは一生御つかえして其の事業にお手伝をさせていただきますましよう⁽¹³⁾と誓った。

九條武子はロンドンで数々の社会事業を視察し、その知識・関心はあったものの、震災以前の彼女にはそれを実行する力がなかったが、田中もとの協力により病院設立を目標に活動をはじめることができたのである。

大正十三（一九二四）年三月から日比谷公園から撤退するよう市から通達があり、本派としても資金不足から日比谷診療所も閉鎖する意向であった。そこで無料診療だけではなく、支払いのできる人から一部実費で診察することとし、日比谷診療所を築地本願寺診療所と名前を改めバラック建の診療所を本所緑川に建てた。その後も本派からの資金援助は年一〇〇〇円と少なく、経営は困難だったため、九條武子は資金調達に奔走した。彼女の資金調達について田中もとの手記には、つぎのようにある。

また或る時武子様がいい事を考えたよ、今度お兄さんがいらっしゃるから書を書いていただいてそれを売ろうとおっしゃって、台下をホテルへ訪ねて、お兄さん書を書いてくださいと云われたら、何するんだ。それを女史に売らせて診療所の費用にするんですと云われたら、大喝一声バカと云われ、お前が田中に売りに歩かせる様な画は一枚でも半枚でも書かないと云われた。すると武子様はお兄さんはひどい、私など病院建設のためなら手の痛くなるほど短冊や色紙を書いて売りまわらせようと思っているのにと云われたら、それはお前の勝手だ、俺は書かないと云われたが、それでも私がお願ひに行くとお前がよそでお菓子やご飯を頂きながら無理なお願ひをした御礼をわしにさせるのか「ショウガナイヤツジャ」と云いながらも其の度毎に書を書いて下さった。⁽¹⁴⁾

このように九條武子は病院建設のためにさまざまなアイデアで資金を調達したり、時には友人から寄付を募っている。⁽¹⁵⁾ 築地本願寺診療所では、大正十四（一九二五）年より歳末無料診療を開始しているが、これは九條武子が初めて得た「洛北の秋」という戯曲の著作料を元に企画したものである。同じように、大正十五（一九二六）年には彼女が「四季」という舞踊の脚本を書き、その慈善興業の収益で診療所に電話を購入している。⁽¹⁶⁾ 「洛北の秋」では最初、たまたま文化人としての活動によって得た収入を「はじめてそうした事で得られたお金を世の為に役立つように使いたい」と、診療所の医療活動に投資していたが、「四季」では「診療所に電話がないから慈善興業をしてその利益で電話を買おう」と、⁽¹⁷⁾ 社会事業のための執筆活動へと思いが変化している。この頃の九條武子は社会事業へ注ぐ意欲が高く、彼女の文化人としての活動がすべて社会事業のための使われたと言っても過言ではない。たとえば読売新聞に連載していた宗教欄「無憂華」を出版したのも社会事業のためであり、この著作料はすべて築地本願寺診療所、（後のあそか病院）に寄付するように夫へ遺言がある。⁽¹⁸⁾

九條武子が自ら企画した歳末無料診療には、資金援助だけではなく自ら慰問にも参加している。そのときの様子を田中もとはつぎのように語っている。

武子夫人は又寒さにふるえている人に着物を与えてやったり、自ら毛糸で編み物をして帽子或いは肩掛けなどを子供や老人に与えてやった。
中略其の時後藤夫人が云うにこれが京都や御法義繁昌な田舎であつたら六条のお嬢様（武子さん）の御手あみと聞けば御仏壇に一度は納めて喜ぶことでしょうが、東京の下町の人は何と思つて使用するやらと云われ話し合つたことです。⁽¹⁹⁾

後藤夫人の言葉から、京都や御法義どころと比べて東京の人々が本願寺のお嬢様としての九條武子にあまり関心がなかったことが窺える。彼女自身は、いかなる場所にも、どのような相手にも、本願寺のお嬢様としてではなく、一人の人間として貧しい人々を慰問したのだと思われる。歳末無料診療は読売新聞に広告が掲載され、好評で多くの患者が訪れたために、翌年以降も続けられ、年を追うごとに診療期間も延長している。大正十四（一九二五）年第一回無料歳末診療は、十二月二七日から二八日の二日間だったものが、大正十五（一九二六）年第二回は十二月十八日から二七日までの十日間になり、昭和二（一九二七）年第三回は十二月十七日から二八日まで十二日間行われた。そして、田中もによると、そのすべてに一日も休まず九條武子は参加している。

このような医療分野での社会事業の他、九條武子は公園内に子ども学校や幼稚園を設置するなど被災児童の教育の再興に尽くした。たとえば、築地本願寺所蔵のマイクロフィルムには、彼女が幼稚園を訪問し、児童一人ひとりに着物を手渡している様子が残っている。⁽²⁰⁾ また、歳末無料診療を開始する前年の大正十三（一九二四）年には、東京真宗婦人会の事業として、震災孤児や若年女子の生活施設「六華園」を創設し、東京婦人会会長である九條武子が園長に就任している。

震災以降、多くの社会事業を続けてきた九條武子は、歳末無料診療中、風邪、歯肉炎から始まった敗血症により志し半ばにして死去した。彼女が高熱をだしてもなお歳末無料診療に出ていた様子を田中もとはつぎのように語る。

歳末診療中は三十八度位あっても、午後から夜おそくまで御出ましになるのでお休み下さいと幾度か申し上げたが、先生も御忙しい中を繰合わ
せて御出ましいただくのだから、私もこれ位の熱で家にじっとしてはおられない、もっともっと高い熱やいたみで苦しみながら、食えること
も出来ない人もありますから、私の体の続く限り出ますと、とうとう暮れの三十日までの歳末診療には一日のお休みもなく出て、なにくれと
心づかいをくださった。⁽²¹⁾

九條武子の社会事業への熱意は自らの生命を奪う結果となったが、その意志は義姉大谷紅子、医師大角真八、看護師田中もとに引き継がれ、あ
そか病院設立への原動力となった。九條武子亡き後、義姉大谷紅子を会長として、昭和五（一九三〇）年社会事業財団法人あそかが設立され、
日比谷診療所から始まった築地本願寺診療所はあそか病院として竣工された。「あそか」という名は、九條武子の短歌の師である佐佐木信綱が彼
女の歌集『無憂華』無憂のサンスクリット語から採用したものである。社会事業財団法人であったあそか会は、その後社会福祉法人となり、近代
的リハビリテーションの設備をもつ総合病院（二八八床）として発展を遂げ、昭和五四（一九七九）年六月には特別養護老人ホームあそか園など
を併設して現在に至っている。

九條武子の信仰と社会事業

九條武子はなぜ社会事業への関心をもち、いのちがけで活動したのか、その動機や背景、彼女の思想を探ってみたい。

まず、九條武子が社会事業に関心をもったのは、短歌と同様に父明如の影響があったのではないかと思われる。明如は明治になり条約が改正さ
れたことによりキリスト教が日本にも進出することに危機感を抱いていた。さらにキリスト教が伝道のために慈善事業をすると考え、それに触発
され本派においても慈善事業を積極的に奨励するため、大日本慈善財団を設立した。その親論には以下のようにある。

この時にあたってわれ真宗の行者たるものはいよいよ二諦の教旨を奉行して後生出離の一大事は弥陀如来の願力に投託し、つねに称名もろと
も大悲のご恩を喜ぶと同時に人間当行の道を行き、社会一般の公務に服するはもちろんのこと、すすんで和衷同心力を公共の事業につくし、

国民民福を増進し、もっと皇運を扶翼したてまつるが真宗行者の本文である。→中略→元来仏教は経文の上にも仏心者大慈悲と説かせられて大慈悲心をもって世の無告の衆生を救い、世出世ともに利益を得しむるが仏教の本旨である。これゆえに聖徳太子の仏法を弘通したまえるにも敬田悲田施薬療病の四院を設けさせられて、もっぱら慈善の事業を勤めたまえり。→中略→いわんや本宗のごときは最下鄙賤の機を所封として他力の悲願をひろめたまえる宗旨なれば僧俗を論さず常に称名もろともに社会下層の窮苦を救い慈仁を施すことを忘れては相済まざる儀なり。⁽²²⁾

明如が大日本慈善財団を設立した契機になったのは、対外的にはキリスト教の進出への危機感があったが、対内的には二諦の教旨、つまり真俗二諦論と慈悲の思想があったことがわかる。前章で述べたように、九條武子は新婚旅行で訪れたヨーロッパ諸国でキリスト教の慈善事業を見学しており、キリスト教の動向を知っていたという点から慈善活動への対外的理由として明如の影響がうかがえる。対内的な理由、真宗教義よる社会事業の位置づけについて、九條武子は大正十三（一九二四）年東京真宗婦人会にて、つぎのような法話をしている。

それから進んでは社会事業にも尽力してこの法悦を十方衆生に推し進めねばなりません、この点については特に皆様の一段の御研究御努力をお願いせずには居られません。自行化他、自信教人信は恒に教へられていることでもあります故、信仰と社会事業は真俗二諦にあたります。⁽²³⁾

九條武子にとって社会事業を進めることは、信心を得、教えに出遇った悦びを他に伝えひろめることであるために仏教婦人会の会員に社会事業に尽力するように勧めている。自ら信じ自ら行じて、他を教化することが、社会事業に結びついているのである。

さらに仏教婦人会が社会事業に関わることについて九條武子は「仏教婦人会の使命」と題してつぎのように講演している。

仏教婦人会は社会の他の諸種の団体とは趣を異にしています。一つには精神的に社会に奉仕し、一つには自分自身を深める、この二つを基礎

の上に結ばれる所に仏教婦人会の使命があるのでございます。⁽²⁵⁾

結婚後も仏教婦人会本部長として活動し、その人生をかけたと言っても過言ではない仏教婦人会の使命は、九條武子の使命そのものである。彼女の使命は社会への奉仕と自分自身を深めることであつた。自分自身を深めるということに関連して読売新聞宗教欄の連載に九條武子は以下のよう述べている。

理想をもたぬものは、生命を忘れているものである。われらの自覚が深められて、理想が高められてゆく。理想なくして生き得ないわれらは、いよいよ内省に燃えて、いよいよ理想に遠ざかっていることを知る。理想の究極は仏である。仏はつねに慈愛の光を放って、一切群生を照護することは、何人も知つてゐる。而も仏救済の願力を、自らの生活の上に体験するところがなかったら、仏は永遠に自分とかけ離れた存在であらう。⁽²⁶⁾

九條武子の究極の理想、阿弥陀仏を信じ見れば見つめるほど、自身が阿弥陀仏とは程遠いことが知らされ、自身を内省すればするほど、阿弥陀仏という理想に照らされていることに気づくのである。これは親鸞の二種深信をあらわしている。親鸞は『教行証文類』『信卷』において善導大師「散善義」を以下のように引文している。

二者深信。深信といふは、すなはちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二つには、決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑なく慮りなくかの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず。⁽²⁷⁾

深信とは、一つに自己は罪惡深重の凡夫であり、そのために輪廻し続けてきたのであり、その迷いから離れる縁は自らにはないと深く信じると

いうことである。もう一つに阿弥陀仏の四十八願は、たとえば第十八願に「もし生ぜずは、正覺を取らじ」とあるように、阿弥陀仏は衆生を必ず救うと誓われていることを深く信じるのである。弥陀の救いを信じ、弥陀の光に照らされて自己が知らされるのである。その自己とは九條武子にとって、現に生き、毎日生活する自己なのである。「仏陀救済の願力を如実に体験する」という生活は、彼女にとってどのような生活であったのか、『無憂華』の中に「慈善」というタイトルで以下のように述べている。

何人も衣食住に支配された生存であり、自らの思想と一致した、あこがれのある生活は容易に得がたい。この意味において、生活することは、この世に在っては希有のことである。ゆえにこの世の多くの慈善を目的とする社会事業もまた、単に衣食住に対する扶助であるならば、それは貧窮者をして、永くまずしき位置に自足せしめる結果となろう。まことの救済は、ただ生活の意義を見出さしむるにある。しこうして自らの生活を省み、これを育み、向上せしめるのは、如実なる信仰の体験を描いて何ものもない。このゆえに、教化の伴わない社会事業が、いかに多く簇生しても、この地上の生活は、所詮満ち足らえるときがないであらう。⁽²⁸⁾

食事をして寝起きをするという具体的な生活において阿弥陀仏の救済を如実に体験することが九條武子にとって理想の仏に向かうことなのである。阿弥陀仏に礼拝するような宗教的な特別な時間に阿弥陀仏の光に遇うのではなく、九條武子は仏の救いを人間として生きる基本的具体的な生活のなかで感じていたのだらう。九條武子は信仰によって生活の意義を自覚させることが真の救済につながると確信し、その実践は物的救済のみならず精神的教化を同時にめざしていた。

本願寺に生まれ、後に男爵夫人となった九條武子が衣食住において困難を感じ、自らも人間として衣食住に支配された生存であり、生活するものであることを自覚したのは、いつであったのだろうか。おそらくその時とは、関東大震災によって彼女自身が被災したときではなかったのだろうか。それが窺えるものとして、被災後に彼女が友人に宛てた手紙にはつぎのようにある。

着物はおかげ様で、どうかかうか妊子のを着着してをります。肌じゅばんから、手拭一筋まで、自分の物はなんにもないので御座いますもの。

その日その時まで、だれ一人、こんな憂き目を想像いたしませう。ほんとに一寸先はわからぬものと、つくづくと考えさせられます。中略
 此頃は玄米ではなく、白米もいただけ、ときどき生魚もいただけるようになってまいりました。しかし、まだなかなか住むに家のない人達が、町を、どこからどこに行きますのか、あはれな姿をしてぞろぞろと歩いてをります。それを見ますと、自分達のしあはせが、どの様に結構なものか、よろこばしてもらへます。中略
 かの一日の、一大天災と同様に、甦生した私は、うまれたままの裸同様になってしまひました。もうこれからは、心を入れかへて、十分に質素にして着なければならぬと、今度のことは、自分に良い教訓を与えられたものと思つてをります。⁽²⁹⁾

本願寺のお嬢様として生まれ結婚後も男爵夫人であつた九條武子の生活は、震災後も住む家のない庶民と異なり早いうちから白米や生魚を食することができ、裕福なものであつたことがわかる。そして、彼女は自分の生活が裕福であるということを自覚し、衣食住に困っている哀れな貧しき者の存在を氣にかけていることがわかる。

九條武子がこのような貧しき者の生活を知つたのは、震災以前、大正十一（一九二二）年十一月に三河島へ慰問をしたときである。そのときの様子を友人に宛てた手紙で彼女はつぎのように綴っている。

頭が変になりましたのは、この間御聞き遊ばしまして、あの細民窟にまゐりました。とても私の思ひもつかぬ敗残の人達でした。貧ゆえに、その人達は、ひがみきつてをります。中略
 すすみきつたその人達を見ますともう胸が一ぱいになって来ました。でもこはいとは感じませんでした。中略
 貧富といふものが、到底のがれられぬものならば、せめて魂の上だけでも、永遠につづくあるものの力、それが神の教と説かれても、仏の慈悲と説かれても、さうしたものにすぎるより、平等の慰安救済の道はある筈が無いので御座いますね。ほんたうに、どんなに尊とい半日で御座いましたか。⁽³⁰⁾

この慰問で九條武子は仏教婦人会本部長の立場から貧しい人々に手拭いやお菓子を配りながら、想像をはるかに超えたその貧しさに驚愕し、社

会における貧しいものの在りようを悲しんでいる様子がわかる。彼女にとって、この日の体験が怖く嫌なものだったのではなく、貧しさを知ることができた半日をすばらしく尊い日と位置づけられている。ここで富める自分と貧しき者に自分が想像していた以上の社会的な差異があることの実感を認識し、貧しき者のための「平等慰安救済の道」の必要性を感じたのである。

佐佐木信綱や籠谷眞智子は、この慰問を九條武子の社会事業の始まりとしている⁽³¹⁾。たしかにこの慰問は彼女の想像や常識を覆す尊い出来事であった。しかし、貧富はのがれられないものであるために、貧しき者は仏の慈悲にすぎるとの言葉から、物質的解決はできないから精神的慰安をと、その両方の解決をめざしていない。この時点で九條武子の貧しい者への関心は、視察という知識的レベルから現実として認識できるように発展したが、まだ彼女がいのちがけで慈善事業を行うほどではない。

貧しき者と違い、衣食住に事欠くことのなかった九條武子が、住むところもなく着物も借りなければならぬという貧しさを大震災によって味わったことは、自分も一被災者として貧しい人と平等であることを感じる大きな体験だったであろう。九條武子は『無憂華』の中で「臨終」というタイトルで震災の体験を語っている。

四面、炎につつまれたなかに、わずかに生をとどめている人たち、――そこには尊きも卑しきも学問ある者もなき者も、老いたるも若きも、凡そ世のありとあらゆる階級、あらゆる種類の人たちがいた。しかし刻々に迫る惨ましき運命に臨んで、心から念じられるものは、みな一様であった。久遠の生命へ――それは、一切の仮象から放たれた者の、最後の願いであった。人生最後の念願においては、貴賤貧富、老若男女の差別はない。⁽³²⁾

九條武子は震災の火の中、自分も貧しい人、卑しい人、若者、老人と変わりなく炎に包まれ死に向かう生命として平等であることを身をもって体験したのである。前章で取り上げたように、彼女は炎に追われる中、歎異抄の言葉を胸に刻んでいた。その中であらゆるものが平等でみな自分と同じく人生の最後において久遠の生命を念願していると感じたのである。老若男女、貴賤貧富の差なく生命が平等であることを体感したことによって、被災した貧しき者のことが他人ごとと思えないようになり、慈善事業に熱心に取り組むようになったのではないだろうか。九條武子は

貧しき者への思いを親しい友人へ宛てた手紙でつぎのように記している。

破れた畳の上で苦しんでいる気の毒な人の為に、ほんの幾分でも、なにかしてあげられたらば、それは私自身がめぐまれるよろこびであると思ひます。⁽³³⁾

他者に何かをしてあげることが九條武子にとって、自分が恵まれる喜びとなっているのである。それは先にみた二諦の論理であるところの俗諦として、社会事業に取り組むことが念仏者の責務だからというのではない。破れた畳の上で苦しんでいる他者に共感しているからこそ、その人の喜びが自分の喜びとなるのである。読売新聞宗教欄の連載につきのような九條武子のエッセイがある。

苦は何人も共にし易い。それは嫉妬、羨望が必要ないからである。苦を共にしても樂を共にし得ないところに、人間生活の悲しい我見自利の意識が動いてゐる。現代は苦をとにもすることを強いても、樂しみをともに味わうことを忘れてゐる。共苦共樂の内容のゆたかな生活は、ただ自利利他に目覚めた、祖聖の『御同朋』に於て、始めてなさるべきである。⁽³⁴⁾

九條武子は苦しみを共にする、苦しみに共感して何かをしてあげるといふことだけではなく、他者と共に喜び共に樂しむことを求めている。苦を共にするだけならば、九條武子の慈善事業は裕福な彼女が貧しき者へ施しを与えるというように上から下へ施しになっていたのかもしれない。同じ阿弥陀仏の救いの上にあると思えばこそ、平等の上他に他者と共に苦しみ、共に樂しむという共苦共樂がなされるのである。九條武子は、まず自ら自利利他に目覚め、阿弥陀仏の救いに喜びを感じていただろう。その法悦について九條武子は読売新聞宗教欄の連載につきのように書いてゐる。

人として生まれた上は働かなければならぬ。何人も与えられた使命に向かつて、努力し精進することは尊いことである。この意味に於て自ら

の営みをもたぬいはゆる暖衣飽食の徒は、一羽の小鳥に対しても愧ぢなければならぬ。しかし個々の働きが、互いに一致し得ない欲望から欲望への奪い合いに墮するところに、浅ましき差別が生じてくる。しかもこの差別の悲哀は、自らの営みを宗教的信念に引き上げて、働きの法悦を体験することをしないから起こる。われらは常に浄化の世界にふれて、自らの生命を健やかに高めて行かなければならぬ。自らの生命をそこに自覚するときは、人生は働くべく余儀なくされてゐるのではなく、むしろ働かずには居られない人生であることに気づくであらう。⁽³⁵⁾

九條武子の働き、彼女の与えられた使命は本願寺に生まれ、信仰を深めると同時に阿弥陀仏への報謝のために他者に尽くすことであつた。他者と共に苦しみ、共に楽しむ中で、他者へ尽くすことが宗教的信念となり、自分の宗教的生命を高めることとなるのである。九條武子は『無憂華』を出版するに当たり、この文章の最後に「このゆえに愉快に働くことのできる人は、それ自身、法悦の営みにめぐまれているものといつてよい。」⁽³⁶⁾と付け加えている。彼女が使命だと思つて働いていた社会事業がだんだんと愉快になり、法悦の営みに恵まれていると感じるにいたつたのではないだろうか。自身の働きが自らのよろこびとなったとき、九條武子は法悦の営みに恵まれていると感謝したのではないだろうか。よるこんで働く九條武子の姿は多くの人に影響を与えた。九條武子が歳末無料診療の支援者と思われる夫人へ宛てた手紙にはつぎのようにある。

市役所の方でも大層賛成してくれまして、毎日三名ずつ受付を出張してもらつて居ります。何の縁故もない町の人達が手伝いに来てくれましたり、自然にかうして助けられて働けることも、全く大きな恵の力のおかげと、法悦しなければ勿体ないと思つてをります。⁽³⁷⁾

歳末無料診療は九條武子の予想を超え、多くの地域の人々が援助していたことがわかる。九條武子が自身の体の不調を押してまで歳末無料診療に出かけていったのは、その大きな恵みに会い、法悦を得ていたためであらう。しかし当然、貧しい家々への訪問は決して悦びばかりではなかつたよう、九條武子は佐佐木信綱につぎのように漏らしている。

み仏のために又苦しんでられる人々の為に、始終喜んでいってをりますが、ただ一つ困りますことは、千軒長屋の近辺はどこにもよく干物

竿がかけてあって、これにお襦袢がかかって居る。この下を潜って行く時、まだ乾かないお襦袢から落ちる雫が、自分の襟の中にはいる。これだけはつらいと思いました。⁽³⁸⁾

おしめから滴る雫が襟の中に入るという体験は、頭で平等だと理解することではなく、貧しい人のその貧しさを身に体感する出来事である。当然それは裕福で清潔な生活が身に染みついて九條武子にとって嫌悪感を抱かせるものである。さらに彼女に苦しみを与えるものとして、慈善事業について、さまざまな報道がある。田中もとは「一週間や十日の診療で何の効果があるものか、あれは売名行為だと云って罵る人さえ當時はあった。」と語り、佐佐木信綱もつぎのように述べている。⁽³⁹⁾

社会事業にお出でになるについて、「売名ではないか」と東京の新聞の中には疑惑の眼をもって婦人を見たものもあったのであります。男爵がお帰りになった当時にも、新聞によつては「ご家庭は円満ではあるまい。何かそこにあるに違いない。」といふので、築地に目をつけて居る。中略ゝそれで社会事業にお出でになると、「売名の仕事ではないか」といふ沙汰もありましたが、併し夫人は、それ等の毀誉褒貶に少しも頓着されなかった。⁽⁴⁰⁾

大正三大美人と謳われた人気振りからか、九條武子は常にマスメディアに取り囲まれてはいたが、その報道は必ずしも彼女の思いを伝えるものではなかった。世間の評判について読売新聞宗教欄の連載に九條武子がつぎのように綴っている。

何人にも異なった使命が与えられている以上、その行動もまた異なってくる。個々の生命はその異なるところに宿ってゐるのであって、それは決して他と妥協することを許さないものである。それ故に、人の行為に対する不用意な嘲罵や、徒らなる讃辞は、個より常を失する場合が多い。これらの危険なる推定は、すべて自己の立場から、他の異なった境地をなめるからであって、独自の生命を冒瀆するの甚だしきものと云わなければならない。しかし乍ら固く自らの生命を握ってゐる者は、もちろん世の毀誉褒貶に動かされる筈はない。若し世評によつて、

自らの使命をまげることがあれば、それは更に大いなる自己冒瀆である⁽⁴¹⁾。

世間からの批評によって自らの使命をまげることが、九條武子にとって自分の生命を冒瀆することになるのである。なぜなら九條武子にとって慈善事業は、彼女の生命とも言える信仰と深く結びついていたからである。九條武子は「信仰は力なり」というタイトルで安芸婦人会にて講演している。

自己を知ることがは仏を知ることです。自己の悲しき心を知ったときに、仏の尊き心を知ることが出来るのでございます。かくして始めて仏の道と一致するのでありまして、そこには茫洋たる法悦の流れのもとに、希望にかがやく彼の岸が見渡されています。かくて信仰は生活の力となり、歩一歩より善き生活へと力強き歩みをつづけてゆくでせう。これを信仰の生活と言ふのでございます⁽⁴²⁾。

九條武子の信仰はゆるぎなく、彼女に力を与え、本願寺のお嬢様と尊ぶ者がなくても、どんな中傷があっても、三八度の熱があっても、慈善事業への熱い思いは変わることにはなかったのである。九條武子は病院建設を見ることがなく亡くなったが、貧しい人と共にあった毎日は自己を知り、仏を知る悦びのときであった。それが九條武子の信仰の生活であったからである。

註

- (1) 吉田久一・長谷川匡俊『日本仏教福祉思想史』法蔵館 二〇〇一
池田英俊・芹川博通・長谷川匡俊編『日本仏教福祉概論』雄山閣出版 一九九九
- 中垣昌美『仏教社会福祉論考』法蔵館 一九九八
- (2) 九條武子『無憂華』実業之日本社 一九二七
- (3) 九條武子『無憂華』実業之日本社 一九二七
- (4) 山中峰太郎『九條武子夫人』大日本雄弁会講談社 一九二六
- (5) 九條武子『九條武子歌集と無憂華』野ばら社 一九六八
- (6) 九條武子『九條武子歌集と無憂華』野ばら社 一九六八
- (7) 佐佐木信綱『九條武子夫人書簡集』実業之日本社 一九二九
- (8) 九條武子『震災を顧みて』築地本願寺 一九二四
- (9) 田中もと『思い出の三十年』三七頁 あそか病院 一九五五
- (10) 千葉栗隆編『新修築地別院史』本願寺築地別院 一九八五
- (11) 籠谷眞智子『九條武子その生涯とあしあと』淡交社 二〇〇二
- (12) 社会福祉法人あそか会近衛正子編『あそか会六十周年史』一九九〇

- (13) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (14) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (15) 佐々木信綱『九條武子夫人書簡集』一四八頁 実業之日本社 一九二九
- (16) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (17) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (18) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (19) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (20) 中央区教育委員会編集『復元された震災の記録〜関東大震災映画フィルム〜』築地本願寺 二四〇六
- (21) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (22) 明如「親論」『本派本願寺社会事業便覧』〇〇五頁 一九二二
- (23) 「東京真宗婦人会における九條総合本部長法話」『婦人』二〇巻七号 一九二四・七
- (24) 二葉憲香『赤松連城資料』上巻三二頁 本願寺出版部 一九八二
- (25) 九條武子「仏教婦人会の使命」『婦人』二二巻九号 一九二六
- (26) 九條武子「無憂華(八十一)」『読売新聞』大正十五年三月三十日 朝刊五面
- (27) 『真宗聖教全書』二巻 五二頁
- (28) 九條武子『無憂華』実業之日本社 一九二七
- (29) 佐佐木信綱『九條武子夫人書簡集』二一四〜二一九頁 実業之日本社 一九二九
- (30) 佐佐木信綱『九條武子夫人書簡集』二六六〜二六八頁 実業之日本社 一九二九
- (31) 佐佐木信綱『麗人九條武子』弘文社 一九三四
- (32) 籠谷眞智子『九條武子その生涯とあしあと』淡交社 二〇〇二
- (33) 九條武子『無憂華』実業之日本社 一九二七
- (34) 佐佐木信綱『九條武子夫人書簡集』一四八頁 実業之日本社 一九二九
- (35) 九條武子「無憂華(九)」『読売新聞』大正十五年一月十七日 朝刊五面
- (36) 九條武子「無憂華(二十)」『読売新聞』大正十五年一月二八日 朝刊五面
- (37) 九條武子『無憂華』実業之日本社 一九二七
- (38) 佐佐木信綱『九條武子夫人書簡集』一〇九頁 実業之日本社 一九二九
- (39) 佐佐木信綱『麗人九條武子』二九九〜三〇〇頁 弘文社 一九三四
- (40) 田中もと『思い出の三十年』あそか病院 一九五五
- (41) 佐佐木信綱『麗人九條武子』二一二頁 弘文社 一九三四
- (42) 九條武子「無憂華(四十一)」『読売新聞』大正十五年二月十八日 朝刊五面
- (43) 九條武子「信仰は力なり」『読売新聞』一九二六・六・五